

一枚の名刺から

あべ 阿部 晋也さん(41)

①

「年商(約7千万円)の4割が名刺」という。

「一枚の名刺から世界を変えたい」

その思いを原動力に、5・5坪×9・1坪の小さな紙片に夢を託して10年になる。ペットボトルの再生材、アフリカ・ザンビア産のバナナの茎など、環境に優しく、アフリカの貧困救済にもつながら「エコ名刺」で扱う素材の豊富さは国内外で並ぶ社がない。社会貢献の仕組みも採り入れて、従業員5人の印刷会社をさらにと光る存在にした。

「わずかでも社会や環境に役立つ道具としての名刺に、ニーズはあると思う」

名刺の素材は15種類。大通公園のワゴンで売れるトウキビの皮、道産小麦のわらも使う。仕入れ先は自ら飛び歩いて開拓した。障害者施設で働く人たちの生きがいづくりにも一役買う。売り上げの1%は環境保全の取り組みなどに寄付し、寄付状況は公開する。

印刷会社にとって、名刺は好んでやりたくはない分野だ。1枚15〜20円程度と単価は低く、利幅も小さい。売り上げ全体のせいぜい数%が一般的。そんな名刺作りに最も力を入れ、今や

人の輪広げるエコ素材

「思いを込めた名刺は受け取る人との間できつと話題になり、出会いが広がるはず」。そう確信している。顧客は3万3千人。エコ名刺は通常の品より割高だが、顧客の9割が2度、3度と注文してくれるリピーターだ。受注の8割が道外からで、受注額は前年比3割増を続ける。「名刺は人と人を結びます。人の輪の広がりに感謝したい」

(編集委員 黒川伸一)

人生にはいろいろな生き方がある。夢があり、挫折もある。それぞれに思いを込めたわが道に、少しばかり光を当てたい。名刺に情熱を注ぐ若き印刷会社社長の話から始めよう。

(5回連載します)



▲
ザンビア産バナナの茎を使ったエコ名刺を手渡す。名刺への思いは熱く(近藤整広撮影)

■プロフィール 父が札幌市豊平区で創業した丸吉日新堂印刷に93年入社。96年、2代目社長に。札幌市出身・在住。妻と1女。札幌大経済学部卒。

サラリーマン1年生当時、休日にはバイクで東京を抜け出すことが多かった
—1993年7月、東京都内(本人提供)

わが道に乾杯!

一枚の名刺から

阿部 晋也さん(41) ②

1993年4月、大学を卒業して接着剤メーカーに就職し、北海道を離れた。配属先は東京の営業本部だった。

時代はバブル崩壊の後。社内の空気はギスギスして、先輩が次々と辞めていく。ある時、上司が役員に理不尽なことで罵倒され、皆の前で土下座させられ

た。上司は「役員が辞めるまで10年間耐えればいい」と話した。「その時、10年後の自分を想像してしまった。働くことは幸

せなはずなのに、幸せが見いだせなかった」。入社5カ月後、退職届を出した。同期25人で一番早かった。

友人を頼ってバイクで東京か

どの印刷を受注できた」。頑張れば仕事が取れた時代の中で、3年後に経営を引き継ぐ。

しかし、95年11月にパソコンの基本ソフト「ウィンドウズ95 日本版」が発売されて以降、家庭にパソコンが普及し、印刷業界の環境は激変。仕事は徐々に減り、「待ったなしの状況」に

悩み抜き 賭けに出た

追い込まれた。

ら長野県に向かう途中、公衆電話から札幌の実家に退職を伝えた。しかし、父に「一度、札幌に戻って来い」と説得され、Uターンする。

経営者として悩み抜いた末、「時代が変わっても『出会い』に欠かせず、絶対になくならないものは名刺だ」との結論に行き着く。それまで名刺の仕事は外注していたが、2002年、かじを切った。「名刺に賭けよう」と。

「1カ月だけのつもりで」、父が脱サラして創業した丸吉日新堂印刷で飛び込み営業の日々を送った。「1日100軒回れば1、2軒から伝票、チラシな

(編集委員 黒川伸一)



わが道に乾杯!

毎日の朝礼で、6人で輪になって前日の話題を語り合う。ささいなことから発見もある

一枚の名刺から

あべ 晋也さん(41)

③

「取引先で従業員の方全員が起立してあいさつされ、素晴らしいと感じた」「ウミガメが危機に瀕している」とテレビ番組で知りました。エコ名刺の売り上げの寄付先に加えては」

毎朝午前8時50分から10分間、札幌市豊平区の丸吉日新堂印刷で行われる朝礼。自身と従業員

5人が輪になり、前日の出来事を話し合う。司会は6人が日替わりで受け持つ。全員が何かを話す。試行錯誤の末、3年前から、現在のようなスタイルになった。

「お互いに今何を感じ、考えているかを分かち合い、アウトプットできる場をつくりたかったのです」

「三方良し」理念に掲げ

たのです」

日々のささやかな話題から、エコ名刺の売り上げの1%を提供する寄付先が広がり、社のサービスのあり方にも生かされてきた。

大学卒業後、希望を胸に就職した接着剤メーカーを5カ月で退職した苦い経験が今に生きて

れたのも、これがベースにある。

「顧客、仕入れ先、世の中に、ほんの少しでも幸せの輪が広がることが、回り回って会社、従業員の幸せにもつながる」。経営者としてそう信じている。

「ワクワクするような会社」を目指して、模索が続く。(編集委員 黒川伸一、写真も)



わが道に乾杯!



▲
多忙な日々を縫い、休日にはサーフィンに興じる。悩みも解消されるという
—胆振管内厚真町の海岸

「常に変化する波相手のサーフィンは、ビジネスに通じるものがあります。状況判断や第六感も問われる」

持ち前の行動力とアイデアで突っ走ってきたエコ名刺作りなどビジネスの世界と、趣味のサーフィンを重ね合わせる。

「いい波に乗るためには待つ場所、乗る瞬間、海底の状況などを見極めることが大切。刻々と状況が変わ

る中、マニュアル通りは通
用しない」

サーフィン歴は30年。今も2週に1回程度、苫小牧近郊などの海岸に向く。

サーフボードに乗りながら思いは巡る。広々とした海のただ中にいるだけで「プラス思考になれ、悩みが解消する。楽しい未来を想像することが多い」という。

子供時代、祖父と釣りに行くうち、海に強くなりかけたようになった。そして関

一枚の名刺から

あべ
阿部

しんや
晋也さん(41)

④

プラス思考で波に乗る

心はサーフィンへ。小学6年になると、毎週のようにバスで札幌中心部のサーフショップに通い、店主に「サーフィンに連れてって」と懇願。根負けした店主がボードなどを貸してくれ、何度も海に連れていってくれた。

親の知り合いのスーパーで手伝いをしてお金をため、中1の夏、待望のサーフボードを買った。子供のころから「思ったら一途に熱くなるタイプ」だった。

海に向き合いながら思う。「自然に敬意を払わねばという思いに胸が熱くなります。環境にやさしいエコ名刺への思いも、海から受けるエネルギーが大きいかもしれない」

(編集委員 黒川伸一、写真も)

わが道に乾杯!

自身の体験を基に軽妙に語る。
「出会い」がキーワードだ—江別市の「江別若手経営塾」で

一枚の名刺から

阿部 あべ 晋也 しんや さん(41) ⑤

さまざまな人との出会いを通じて、社会や環境への貢献の仕組みを採り入れたエコ名刺は話題を集めた。2010年に「ちっちゃいけど、世界一誇りにしたい会社」(ダイヤモンド社)で掲載8社の一つとして、また今夏にも「小さくてもいちばんの会社」(講談社)で59社の一つとして紹介された。

2冊の筆者坂本光司さん(法政大教授)は、丸吉日新堂印刷を「経営の正しさ、仕事にこめている思いが日本一」と評した。本の影響などもあって、最近

は講演や講話に出向く機会が増えた。年に6、7回、壇上に立つ。演題は「一枚の名刺が世界を変える」。

講演・講話では、そんな熱い思いをぶつける。「話ができるのは周囲から与えてもらったチャンス。つなかりを広げる機会と受け止めて臨んでいる。

「エコ名刺が地域、国、ひい

来年5月には、札幌市立高校

出会いが人生を変える

ては世界の環境を変え、また良い縁を結ぶ道具として生かされてほしい、との願いをこめて話しています」

の校長会などが主催する市立高等学校校進路探求セミナーで、高校生2千人を相手に話す予定だ。「だれでも自分の願うような人生を送ることができる。若い皆さんには、いろいろな出会いを重ねる大切さを話したい」

廃棄されていたザンビア産バナナの茎を使うエコ名刺は、現地で素材作りの雇用を生んだ。名刺の利用者4千人が毎月100枚使えば、約200人の生活

い皆さんには、いろいろな出会いを重ねる大切さを話したい」(編集委員 黒川伸一、写真も)

|| この項おわり ||

